



■ テーマ名

現代における芸術音楽の作曲

■ キーワード

現代芸術、現代音楽、作曲技法、伝統と現代、世界と日本

■ 研究の概要

芸術音楽の作曲を課題としています。今日の芸術音楽とは、「現代音楽」と言われるもので、西洋のクラシック音楽から変化発展してきたものです。現在の一般の人々にとって身近な音楽は、いわゆる「ポピュラー音楽」ですが、こちらは娯楽としての音楽であり「現代音楽」とは言いません。20世紀の初頭辺りから、芸術と娯楽が明確に乖離していき、音楽も楽しみとしてのものと芸術的なものとに分かれていくことになりました。現代の芸術的なものとしての音楽が「現代音楽」ということになります。

現代の芸術とその周辺には、永遠に答えの出ないような多種多様な課題や問いが渦を巻くように存在しています。芸術が単なる娯楽(楽しみ)ではないものとする、そこでは何が行われているのでしょうか。芸術には創作者や送り手と享受者が存在しますが、その関係はどのようなもののでしょうか。更にそれらを成り立たせるコミュニティ、延いては文化とは何でしょう。歴史や地域、政治や世界情勢、個人の心から民族、宗教、それらの文化の示す世界観、宇宙観はどのようなものなのでしょう。そのような中、人は自らどのように感じ考え生きるべきなのでしょう。

一方で、芸術創作の現実的側面は、具体的実際のものです。作曲においては、先ず何の音をどのぐらいの長さで設定する(楽譜に書く)か、次の音をどう決めるのか、そこの和音は、そして楽器は等々。ここにあるのは極めて即物的で技術的な課題であり、創作はそういった作業の積み重ねです。

今現在、私が直接の課題としているのは、以下の四点です。声楽作品において、日本の古歌を使用して現代の音楽世界をいかにして実現するか。様々な管弦楽器の独奏曲の創作にどのようなヴィジョンがあり得るか。ピアノの楽器特性を十分に活用した現代のピアノ独奏作品をどのように作りうるか。通常の楽器にエレクトロニクスを加えた音楽をどのように実現できるか。そして、過去の4曲のピアノ作品の録音を4年がかりで進めており、録音の際に改訂を施しています。

■ 他の研究/技術との相違点

作曲作品の公開は、主に同志の作曲家団体による演奏会への参加という形で行われ、昨今は動画配信も行われています。音楽関係の団体としては、「日本現代音楽協会」「関西現代音楽交流協会」「神戸音楽家協会」「茨木新作音楽展」の会員になっています。

■ 今後の展開、実用化へのイメージ

現在の課題としては、2022年10月に初演を予定しているソプラノと室内楽による作曲、次いで23年3月に予定しているエレクトロニクスを使用した音楽の作曲で、こちらは過去の作品をリメイクする予定です。一方2019年より進めているピアノ独奏作品集の改訂とレコーディングを23年初頭に終了し、CDとして発売する予定です。

■ 関連業績 (特許・文献)

作曲作品

「独奏トロンボーンのためのモーメント・ミュージカル」(2021) (2022年初演、大阪・豊中)

「室内楽第8番万葉参照Ⅲ」(2021) (2021年初演、大阪・茨木)

「独奏コントラバスのための音楽」(2020.21) (2021年初演、大阪・豊中)

評論・論考

「ジョン・ケージ 何をしたのか、何をしたかったのか」(2022年3月・月刊「音楽現代」誌)

「イアニス・クセナキス 生誕100年」(2022年2月・月刊「音楽現代」誌)

「オリヴィエ・メシアン 歿後30年～独自の音楽性、その位置と評価～」(2022年1月・月刊「音楽現代」誌)

「現代音楽の最前線 第2次世界大戦以降の名作5傑」(2021年8月・月刊「音楽現代」誌)

「現代作曲家のレイイム」(2021年7月・月刊「音楽現代」誌)

「朝比奈隆のベートーヴェン 歿後20年」(2021年6月・月刊「音楽現代」誌)

「ショスタコーヴィチの名作たち 交響曲第5番、第4番」(2021年5月・月刊「音楽現代」誌)

「ツェムリンスキー生誕150年、シェーンベルク歿後70年」(2021年4月・月刊「音楽現代」誌)

■ 研究者から一言

芸術の創作は、芸術への感動とその行為への強い興味、愛着により成立します。それは享受することも、音楽の場合は演奏することも同様です。普段芸術に特に深い関わりを持つことのない方々でも、小さな心の動き、わずかな興味から芸術に接することで、生活や人生がより深く豊かなものになればと願っています。